

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32635

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02842

研究課題名(和文) 日本古代における漢籍の伝来時期に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Introduction Time of Chinese Books in Ancient Japan

研究代表者

榎本 淳一 (ENOMOTO, Junichi)

大正大学・文学部・教授

研究者番号：80245646

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代に伝来した漢籍の伝来時期を明らかにし、その受容と影響を考察する研究を行った。最も大きな成果としては、『日本国見在書目録』と中国隋・唐の宮廷図書目録の対比により、どの時代に写された漢籍なのかを特定し、その伝来時期を推定するという研究手法を開発し、これまで未解明であった隋代の書籍の日本への流入状況を明らかにすることができたということがある。

また、この研究における基本史料である『日本国見在書目録』の史料性格を明らかにする研究も行うことができたし、伝来漢籍の全体像を俯瞰する概説をまとめることもできたし、『晋書』という唐代に編纂された漢籍(史書)の写本調査の結果をまとめることもできた。

研究成果の概要(英文)：I have researched on the introduction time of Chinese books in Ancient Japan. The main results of my study are the following 4. I compared the catalogue chapter in the Suishu (隋書) to the Nihonkoku genzaisho mokuroku (日本国見在書目録) to estimate which books were brought back from China by the Japanese missions. I solved the character of Nihonkoku genzaisho mokuroku. I gave the whole picture of the brought Chinese books. I gathered the survey result of the manuscript of Jinshu (晋書).

研究分野：日本古代史

キーワード：書籍目録 隋書経籍志 日本国見在書目録 漢籍

## 1. 研究開始当初の背景

古代日本にどのような漢籍が伝来したかについては、平安時代前期の学者藤原佐世が編んだ『日本国見在書目録』以来、多くの学者・研究者が研究・検討を重ねてきたが、概して静態的な研究が多く、どの時期にどの漢籍が伝来したかという動態的な研究はあまり行われてこなかった。『日本国見在書目録』も、編纂された9世紀末に日本に存在した漢籍をリストアップしたもので、掲載された漢籍がいつ頃伝来したかという情報は殆ど記されていない。特定の漢籍を取り上げ、その漢籍がいつ頃伝来したのかを論ずる研究も存在するが、あくまでも個別的な検討のみで、漢籍全体を見通すような研究は皆無といっ

てよいだろう。しかしながら、漢籍が日本の政治・文化・社会に与えた影響を具体的に考えるためには、いつどのような漢籍が伝来したかを明らかにすることが必要である。しかも、一部の漢籍だけを検討対象にするだけでは不十分であり、やはり伝来漢籍の全体像を解明することが重要である。このような課題を解決するために、代表者(榎本)は、『日本国見在書目録』と諸史料との対比を長年行ってきた。その結果、2008年に発表した「遣唐使による漢籍将来」という論文において、『隋書』経籍志・『旧唐書』経籍志・『新唐書』芸文志という中国宮廷蔵書目録との突き合わせにより、『日本国見在書目録』所載漢籍の書写年代を明らかにできるのではないかとこの着想を得た。さらに、この着想をもとにして、中国と日本の書籍目録との比較から漢籍の渡来時期を特定するという研究手法を、『日本国見在書目録』に見える梁代の書籍について(2013)という論文で開発した。この論文では、中国南朝の梁代の書籍目録である『七録』(逸文)及び元帝の『金樓子』内の著作目録と『日本国見在書目録』を照合することにより、梁代に書写された写本の系統を引く書籍が9世紀末段階で少なからず伝存していたことを明らかにし、そのような漢籍がいつ頃日本に伝来したか特定することができた。漢籍の伝来時期を特定するというこの研究手法は、梁代以外の時代にも応用可能なものであり、隋代、唐代またそれ以外の時代についても漢籍の渡来時期を明らかにできるものと考えられる。

以上のような代表者のこれまでの研究成果から、個々の漢籍の渡来時期を特定することができるのみならず、日本古代における漢籍の伝来に関して全体像を把握することができると思われるに至った。

## 2. 研究の目的

中国の書物(漢籍)が、日本古代の政治・文化・社会に多大な影響を与えたことは広く認知されている。しかし、どの時期にどの漢籍が日本にもたらされたかについては、一部の漢籍について個々に検討されることはあ

るが、漢籍全体を見通すような研究は存在しない。そのため、古代日本の歴史的展開と漢籍との関連性があまり深く考察されることがなく、現在に至っている。

そこで、本研究では、できるだけ多くの漢籍の日本への伝来時期を特定することにより、漢籍伝来の時期区分を行い、漢籍が具体的にどのような影響を古代日本にもたらしたかを明らかにすることを目的とする。漢籍の舶載には対外関係が大きく関わっており、本研究は対外関係史研究にも貢献できるものと考えられる。

## 3. 研究の方法

日本と中国の書籍目録の比較、漢籍の古写本調査、古代書籍に引用される漢籍の分析という3つの研究方法によって、日本古代に存在した漢籍の渡来時期を特定する。その結果を踏まえて、漢籍渡来の時期区分を行い、日本古代の政治・文化・社会への具体的な影響を明らかにする計画である。また、研究分野が多岐にわたることから、多分野の研究者に研究協力者として研究会に参加して頂き、その際に本研究に対する助言・情報提供を受ける。これにより、研究視角の多角化、広範な隣接分野の研究情報の入手を図る。

## 4. 研究成果

日本古代に伝来した漢籍の伝来時期を明らかにし、その受容と影響を考察する研究を行った。最も大きな成果としては、『日本国見在書目録』と中国隋・唐の宮廷図書目録の対比により、どの時代に写された漢籍なのかを特定し、その伝来時期を推定するという研究手法を開発し、これまで未解明であった隋代の書籍の日本への流入状況を明らかにすることができたということがあった。

また、この研究における基本史料である『日本国見在書目録』の史料的性格を明らかにする研究も行うことができた。従来意見の一致を見ていなかった同目録著録の漢籍の総巻数を確定する方法を提示し、同一書が繰り返し著録されている重出書の背景にある問題についてひとつの解答を示すことができた。それから、十世紀以前の日本へ伝来した漢籍の全体像を俯瞰する概説をまとめることもできた。さらに、九州国立博物館所蔵の『晋書』という唐代に編纂された漢籍(史書)の写本調査の結果をもとに、同写本の歴史的意義や僚巻との関係について解明することもできた。

これ以外にも、平安時代中後期の「国風文化」期の漢籍伝来の具体相と影響について、また隋の煬帝によって編纂された『江都集礼』という礼書の伝来時期とその影響などについて、国際学会などで口頭報告できたことも成果として挙げておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 榎本淳一 「中日書目比較考」、『東洋史研究』、査読有、76-1、2017、pp.37-78
2. 榎本淳一 「『日本国見在書目録』に見える重出書について」、『史聚』、査読無、50、2017、pp.160-167
3. 榎本淳一 「奥州平泉の黄金文化について」、『中尊寺仏教文化研究所論集』、査読無、4、2017、pp.41-50
4. 榎本淳一 「(書評)木本好信著『藤原北家・京家官人の考察』」、『古代文化』、査読無、68-3、2016、pp.126-128
5. 榎本淳一 「(書評)河内春人著『東アジア交流史のなかの遣唐使』」、『国史学』、査読無、218、2016、pp.117-122
6. 榎本淳一 「(書評)皆川雅樹『日本古代王権と唐物交易』」、『歴史評論』、査読無、787、2015、pp.91-95

[学会発表](計5件)

1. 榎本淳一 「『江都集礼』の編纂と意義・影響」、第63回国際東方学会議、2018
2. 榎本淳一 「龍門広化寺善無畏三蔵真身考」、第2回日本洛陽国際シンポジウム、2018
3. 榎本淳一 「『国風文化』における『漢』と『鄙』」、日本史研究会シンポジウム、2017
4. 榎本淳一 「東アジア世界の変貌と鞠智城」、鞠智城東京シンポジウム、2017
5. 榎本淳一 「遣隋使・遣唐使と古代日本の対外交流」、「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推薦記念講演会、2016

[図書](計16件)

1. 榎本淳一 他、同成社、『古代史料を読む 下 平安王朝篇』、2018、293、pp.108-123
2. 榎本淳一 他、小学館、『中尊寺と平泉をめぐる』、2018、127、pp.48-49
3. 榎本淳一 他、吉川弘文館、『史料・史跡と古代社会』、2018、552、pp.394-414
4. 榎本淳一 他、筑摩書房、『古代史講義』、2018、286、pp.199-213
5. 榎本淳一 他、竹林舎、『古代日本と興亡の東アジア』、2018、557、pp.321-342
6. 榎本淳一 他、勉誠出版、『日本古代史の方法と意義』、2018、852、pp.58-70
7. 榎本淳一 他、中西書局、『法律史訳評第五巻』、2017、362、pp.99-109
8. 榎本淳一 他、社会科学文献出版社、『歴代令考 上』、2017、567、pp.418-429
9. 榎本淳一 他、勉誠出版、『日本古代交流史入門』、2017、573、pp.378-388
10. 榎本淳一 他、熊本県教育委員会、『鞠智城 東京シンポジウム 成果報告書2016』、2017、174、pp.59-79、資料編23-30
11. 榎本淳一 他、吉川弘文館、『日本古代の交通・交流・情報2 旅と交易』、2016、

314、pp.277-295

12. 榎本淳一 他、青史出版、『小此木輝之先生古稀記念論文集 歴史と文化』、2016、698、pp.417-430
13. 榎本淳一 他、清文堂、『古代の人物 奈良の都』、2016、392、pp.341-358
14. 榎本淳一 他、中国政法大学出版社、『法律史訳評 2014年巻』、2015、392、pp.160-175
15. 榎本淳一 他、勉誠出版、『新編 森克己著作集5 古代～近代日本の対外交流』、2015、590、pp.433-441
16. 榎本淳一 他、勉誠出版、『日本「文」学史 第1冊』、2015、530、pp.248-270

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://acoffice.jp/tsuhp/KgApp?kyoinId=ymlbgksgggg>

6. 研究組織

(1)研究代表者

榎本 淳一 (ENOMOTO, Junichi)  
大正大学・文学部歴史学科・教授  
研究者番号: 80245646

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者(12名)

小林 春樹 (KOBAYASHI, Haruki)  
大東文化大学・東洋研究所・准教授  
小林 岳 (KOBAYASHI, Takashi)  
早稲田高等学院・教諭  
河内 春人 (KOCHI, Haruhito)  
関東学院大学・経済学部・准教授  
塚本 剛 (TSUKAMOTO, Tsuyoshi)  
工学院大学・基礎教養教育部門・非常勤講師  
大橋有紀子 (OHASHI, Yukiko)  
お茶の水女子大学・非常勤研究員  
濱田 寛 (HAMADA, Kan)  
聖学院大学・人文学部・教授  
吉永 匡史 (YOSHINAGA, Masafumi)  
金沢大学・人間社会研究域・准教授  
柿沼 陽平 (KAKINUMA, Yohei)  
帝京大学・文学部・准教授  
会田 大輔 (AIDA, Daisuke)  
明治大学・文学部・兼任講師  
河内 桂 (KOCHI, Katsura)  
東京女子学院・非常勤講師

江川 式部 (EGAWA, Shikibu)  
明治大学・商学部・兼任講師  
橋本 繁 (HASHIMOTO, Shigeru)  
早稲田大学・文学学術院・非常勤講師